

『三昧耶戒序』に説かれる勝義心について

伊藤教宣

弘法大師空海（七七四～八三五）撰述の『三昧耶戒序』¹⁾は信心・大悲心（行願心）・勝義心（深般若心）・大菩提心という四種の思想を基調として構成されているのであり、その四種の構成は、『菩提心論』²⁾において

諸仏菩薩。昔在因地。發是心已。勝義。行願。三摩地為戒。乃至成仏。無時暫忘。（中略）一者行願。二者勝義。三者三摩地。と説かれていること、また『守護国界主陀羅尼經』卷第十で然彼一切皆以信心而為根本。以深般若而為先導。大菩提心及大悲心以為莊嚴。

と説かれていることなどに直接的根拠を求めることができよう。しかし『守護国界主陀羅尼經』においては、その名称が記されても内容の解釈には触れていないので、そこからはただ名称のみが引かれているだけである。したがって信心の解釈については『菩提心論』にもそれがないので、『釈摩訶衍論』卷第一（大正三三・597・a）から信心の十種義なる説文を引用し、その積段としてしているのである。

このような『三昧耶戒序』の四種のうち、十住心の教判思想³⁾という空海独特の思想がみられる勝義心の説段は、どのような思想背景をもって成立してきたのであろうか。まず『三昧耶戒序』に説かれる勝義心の概要を示すと次のようになる。

- ① 勝義心とは諸法教を簡括する心、智慧。
- ② 諸法教の優劣を簡括する智慧は、凡夫・二乗・十地の菩薩の所知する境界ではなく、如来の所説によって知るのである。

（以上を述べた後に空海所立の十住心思想に基づいて、異生瓶羊の凡夫から極無自性心までの九種の住心について、教相判釈の略説がされる）

- ③ 如来の教勅たる最上の智慧によって乗の差別を簡括する
- ④ 深般若の妙慧をもって前掲の九種の住心をみれば、それらの諸法教は無自性で止まることなく、展転勝進するのである。

これらの勝項を要約すると、勝義心とは諸法教（住心）の優劣・差別を簡括する智慧であり、更にその智慧によって前九住心が無自性であることを観察するのである。また、その智慧は如来の教勅による最上の智慧なのである。

この『三昧耶戒序』における勝義心に対して、四種心思の直接的根拠となった『菩提心論』に説かれる勝義心の概要を示すと次のようになる。

○勝義心とは一切法の無自性・空・無相を観察する智慧のことである。

○凡夫・外道・二乗・大乘の菩薩の境界を越えて、一切法の無自性を観察すべきである。

○諸仏の慈悲たる衆生済度のための説法は無自性であり、覚つてしまえば捨られるべきものである。

○以上を補足する意味で『大日経』『住心品』から「諸法は無相なり、為く虚空の相なり」なる説文を引証し、それらに同義としている。

すなわち、ここに一貫してうかがわれることは、一切法が無自性であり、その一切法無自性を観察する智慧を勝義心としている、ということである。

以上のように示された『三昧耶戒序』と『菩提心論』との勝義心を対比してみたときに、『勝義心』とは「一切法の無自性・空を観察する智慧のことである」という、一見すると

『三昧耶戒序』に説かれる勝義心について（伊藤）

両者の間には共通した考え方もっているように見受けられる。しかし、その主張しようとしている所には少なからぬ差異がみられるのである。たとえば『菩提心論』において「凡夫乃至大乘の菩薩等の境界を越えて一切法の無自性を観察する智慧」、諸仏の慈悲たる諸説法の無自性を観察する智慧を『勝義心』としているのに対して、『三昧耶戒序』では「諸法教の優劣・乗の差別を簡括する智慧」のこととしており、「諸法の無自性」を「前九住心の無自性」というように変化させているのである。すなわち『菩提心論』での「凡夫乃至大乘の菩薩等を越えて」ということ、「説法としての諸法」ということを、『三昧耶戒序』では「諸法教の差別・住心の無自性」として解釈し、教判思想が成立しており、そこには勝義心思の転換がみられるのである。

この諸法教の差別という十住心の教判思想は、『菩提心論』のこの勝義心段と共に、『大日経』『住心品』の心続生段に基づくのであるが、箇条②③にあげた解釈そのものも

心続生之相

諸仏大秘密

外道不能識

我今悉開示

という、心続生の相が説かれる境地についても、その根拠としていたことが明らかであり、『三昧耶戒序』における勝義心思の成立には、『大日経』『住心品』所説の思想が大きな

役割りを果たしているということが出来る。

ところで、『菩提心論』に引用された「住心品」の

諸法無相。謂虛空相。

という説文の説相をみると、その前後で

秘密主云何菩提。謂如_レ実知_二自心_一。秘密主是阿耨多羅三藐三菩提。乃至彼法。少分無_レ有_レ可_レ得。〔中略〕世尊誰_二求_二一切智_一。誰_二為_二菩提_一。成_二正覺_一者。誰_二起_二彼一切智_一。仏言秘密主。自心

尋_二求菩提及一切智_一。云云

といわれ、菩提・一切法・一切智を自心に尋求することの一部として説かれているのである。『大日經疏』巻第一ではこれらを釈して

菩提心名_二為_二一向志求一切智_一。即是菩提心者。此中誰_二為_二能求_一。誰_二為_二所求_一。誰_二為_二可_レ覺_一誰_二為_二覺_一者。

といひ

由_レ之_レ當_レ知_レ離_レ心_レ之外。無_レ有_二一切法_一也。若_レ瑜伽行人。正觀_二三法実相_一。即是見_二心実相_一。心実相者。即是無相菩提。亦名_二一切智_一。

といわれており、また「一切法無自性」については巻第七で

以上一切法無_レ不_レ從_二衆緣_一生。從_レ緣生者。悉皆有_レ始有_レ本。今觀_レ此能生之緣生。亦復從_二衆因緣_一生。展転從_レ緣誰_二為_二其本_一。如是觀察時則知_二本不生際_一。〔中略〕如_レ是見_二一切法生_一時。即是見_二本不生際_一。若_レ見_二本不生際_一。即是如_レ実知_二自心_一。如_レ実知_二自

心_一即是_二一切智_一。

といひ

若_レ是從_二衆緣_一生則無_レ自性。若_レ無_レ自性。當_レ知_レ是生即不生。至_二於本不生際_一。但是心性海耳。

と釈しているのである。『菩提心論』の中で『大日經』「住心品」からの説文を引証するにあたっては、ここに示したような『大日經疏』の諸説をも考慮していたはずであり、それらをつまみながらも省略し、短文の引証によって勝義心思想を完成したものとして述べていることが考えられる。これが『三昧耶戒序』に至ると、それらの思想はすべて勝義心段の次に説かれる「大菩提心」段へ移行されているのであり、「能求の菩提心」「所求の菩提心」なるものも、『大日經疏』の説文を根拠としていると観ることが出来るのである。

以上のように、空海は『三昧耶戒序』における勝義心を、諸法教の差別、住心の優劣を簡括する智慧としてとらえ、教判思想の説段として位置づけているということが出来る。

- 1 弘全一・132以下。2 大正三二・572・c。3 大正一九・572・a。4 大正三二・573・a・b。5 大正一八・2・a。6 7 大正一八・1・c。8 9 大正三九・588・a。10 大正三九・651・c。11 大正三九・654・b。

（大正大学綜合仏教研究所研究員）